
楽しければ良いんじゃない？

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽しければ良いんじゃない？

【Nコード】

N8448B

【作者名】

蒼

【あらすじ】

間宮家長男、要とその妹かなめが緩いテンションでお送りするラブコメディの様なもの。不定期更新です。

0 話 人物紹介と舞台袖（前書き）

ぼちぼち書いていきますので、気が付いたら読んでやってください。

0話 人物紹介と舞台袖

登場人物紹介

間宮 要 まなべ かなめ

性別・男

年齢・16歳

身長・173センチ

体重・57キロ

備考・間宮家の長男。黒髪黒目、伸びた髪を後ろに括っている。妹の意味不明なボケを聞き流す事無く、律儀に突っ込む毎日を過ごしている。容姿は中の上、特に格好良い訳でもない。ちなみに根っからの甘党。

間宮 かなめ

性別・女

年齢・16歳

身長・170センチ

体重・49キロ

備考・間宮家の長女。黒髪黒目、腰まで届くロング。学校の時には一つに纏めている。兄と二人、怠惰で楽しい日常を送っている。容姿は特上だが、本人に自覚はないようだ。兄が好き。どこまでも好き。

プロローグ・舞台袖

「むむ、レモンか。しまったな、買い出しに行かないと無いぞ」

「・・・兄さん」

「ちょっと待て。えーと、レモンの代わりになる物なんかあったか・
・・・？」

「兄さん、レモンは後にして」

「けどな、レモンの酸味と爽やかさがこの料理の決め手なんだぞ
？」

「美味しそうね・・・兄さん、お腹が空いた」

「だから、ちょっと待てって。ああ、スーパーも閉まってるな」

「兄さん、黄色いピーマンを見つけた」

「んなもん、色が一緒なだけだろうが」

「そうね。私、ピーマン嫌いだし」

「じゃ、なんで勧めたんだよっ！」

「兄さん、赤ピーマンがあるわ」

「どっちにしるピーマンだろっ。え、というかピーマン嫌いなんじやなかったのか」

「ええ、嫌い」

「じゃあ、なんで選ぶんだよ」

「ピーマンしか無いもの」

「いやいや。昨日、買い物したばかりなんだぞ。いくらなんでもっ。ピーマンしかねえっ」

「パプリカもあるわ」

「この際、一緒だっ。うーわー、冷凍室までピーマンしかねえよ・・・
・どれだけピーマン食べる気なんだよ、俺」

「兄さん、ピーマン好き？」

「俺が聞きたいよ」

「自問自答してる場合じゃないわ、兄さん」

「まだしてないぞ？自問の部分だぞ？というか、どう考えても俺じゃないぞ。ピーマン好きにもほどがあるだろ」

「そろそろ本編が始まるわ。兄さん」

「スルーか？」

「この小説『楽しければ良いんじゃない？』は今回のような緩いテンションで語られるお話です」

「ボケを放棄するな」

「一話完結、主に私と兄さんとの日常をお送りする予定です」

「なあ、今までの前フリは無しにするのか？おい」

「兄さん、さつきから煩いわ」

「ツツコミもままならないな」

「芸人失格ね」

「ダメだしされたよ」

「プロフィールに『ヘタレ』と付け加えておくわ」

「実の兄にそれは無いだろ、おい」

——根っからの甘党。かなりのヘタレ。

「おいコラ、作者アアツ！」

「それでは、本編をお楽しみください」

1話 怠い日曜日の朝

その日は日曜日。

日本全国の学生たちが怠惰なそれでいて楽しい時間を過ごせる曜日である。

俺こと間宮 要も例外なく布団の中で芋虫のごとく無駄な時間を過ごさせてもらっている。

ビバ、日曜。素晴らしい。

「良い。せつかくの日曜なのに友達と遊びに行かず、かといって家事をするわけでもなく、まどろんでいられる朝。良い朝だわ」

具体的に人の心情を述べてくれてありがとう。

だが、ここはツツコムべきなのだろう。間違いない。

取りあえず、目の前で眠そうにこちらを見ている奴の頬を摘む。柔らかい。

「どうして、ここに居る？」

言いつつ、頬を左右に伸ばす。なんだろ、少し楽しくなってきたぞ。

頬を摘まれている目の前の顔はしきりに唸っているが、さして気にしてはいない様だ。

証拠に半眼だった瞳がゆっくりと閉じ始めだして、

「えひゃう」

少し強めに伸ばしてやると不思議な返事。痛かったのか眠いのか、おそらく後者だろう、少し涙目になっている。

「にいひゃん」

間抜け響きだな。言われているのは俺なんだけど。

上手く喋れないのにもかかわらず、目の前の顔は喋りだした。

「ひゃくはん、ひゃむひゃっひゃてひょ？」

「さっぱりだ」

即答。ちよつとだけ眉を寄せられる。喋りにくくしてるのは俺なのだが、抵抗してこないのが悪い。

無言のまま数分、俺たちは見つめ合う形となる。

と、摘んでいる頬がうつすらと赤く染まってきた。そろそろ離れた方が良いかな？

「ひゃのひい？」

「まあな」

「ひょう」

そして無言。

いや、離してって言わないのかよ。

なぜか半眼をちよつと楽しそうに細められる。それどころか、布団の奥から手が伸びてきて俺の頬を摘む。

一体、何がしたいんだ。

「ひゃのひいひゃ？」

「ひゃのひい」

「ひようひゃ」

このままじゃ収拾がつかない。寝呆けた頭で必死に考えている間にも、摘まれた頬が左右に伸ばされる。痛くはないけどイラツとくるな。

「ふふ」

楽しそうに俺の頬で遊んでいる我が妹には悪いが、このグダグダした展開を断ち切らなければ。

そう結論づけ、今だに妹の頬を摘んでいた手を離す。ついでに妹の腕を離させる。あ、残念そうな顔。

「さて、地味に頬がヒリヒリするのは置いておくとしてだ」

ちよつと眉を寄せてこちらを見る妹。よく分からない罪悪感を押し込み質問するでしょう。

「どうしてここに居る？」

「寒かったから」

単純すぎる。というか『寒い』だけで人の布団、しかも兄であろうが生物学的には男の横に潜り込むのか。

答えは『無い』だろう。

勿論、恋人同士とか、仲が良い家族ならば実行するのもかも知れないが。その辺りは置いておく事にして。

「あのな。よく考えて見ろ。寒いなら上着を着るとか、掛け布団をもう一枚とかな。あるだろ？」

妹の瞳を真つすぐ見て、少し強めに言ってみる。

「兄さん、人の体温って安心するわね」

この期に及んでへ理屈ですか。

1話 怠い日曜日の朝（後書き）

だらだらしていますが、ご容赦を。一日1話。更新・・・できれば。

2話 怠い日曜の昼の朝食

目の前には踊るウインナー。訂正、フライパンで炒められているウインナーだ。

隣のコンロには弱火で温めている味噌汁。傍には先程できた目玉焼きが盛り付けられた皿が二枚。

間違いなく朝食の風景だ。

起き抜けに眺めた時計が十一時を指していた事は無かった事にしよう。

「兄さん、お腹が空いたわ」

背後から切羽詰まった声。ついでに朝食を作り始めてから数えると五回目である。先に食べてろ、とも言ってみたのだが頑なに拒まれ、出た言葉が、兄さんと一緒に食べたい、だそうだ。

不覚にも可愛いなコイツと思った俺はシスコンなのでしょうか？

「ほら、出来たぞ」

「見事なまでに当たり障りのない朝食ね」

作り手に、失礼な事をさらりと言ってくれる我が妹に少しだけ殺意が湧く。

先程の感情は気のせいだった様だ。

「何の面白みも無くて悪うござんしたね」

「大丈夫よ、兄さん。私は気にしてないわ」

ニコリと妹。俺の心に生まれた殺意は順調に育ち始めた。

と言うより、作ってるの見てたんだから今更なのは分かってるだろ。まあ、本人があえて言っただのは分かっているんだが。

どちらともなく、手を合わせ食事が始まる。

我が家、もつとも俺と妹の二人きりの食事の時だけだが。終始、食事中は無言である。

とは言っても、仲が悪い訳ではなく、その場に陰悪な雰囲気が漂う事はまず無いだろう。

では、何故か。

中学生の時だったか。偶然、両親が不在の日があった。その頃から料理を一つの趣味としていた俺は、腕を振る舞う事にしたのだ。何を作ったまでは覚えてないが、程なく料理は完成し食事となった。その時である。学校の事や友達の話、話し掛けても淋しい返事しか返さない妹に聞いてみた。

どうして、何も喋らないんだ？

少しの不安を抱えて聞いた。すぐに杞憂だと思い知ったのだが。

話し掛けなくても兄さんはそこに居るから

体よく、はぐらかされたのか、それとも本心だったのか。未だに分からない時もあるが、納得してしまったのは仕方ないだろう。見惚れるぐらい微笑まれたら何も言えないしな。

その日から、二言三言、言葉を交わすぐらいで、二人きりの時には静かな食事をするようになった。

不思議な事に、思ったより辛くは無いんだよな。

「兄さん？」

思わず、握っていたコップを落としそうになる。時すでに遅く少しばかり中身を零してしまったが。

と、目の前に布巾。妹が差し出したソレを受け取り、礼を言おうとそちらに目を向けると空になった食器が入った。

「食べ終わったなら、流し台に置いといていいぞ。後で洗うから」

言いつつ、改めて妹の顔に目をやる。何時もの涼しげな無表情かと思えば、目を細めてニコリと笑い顔。なんで笑ってるんだよ。

「兄さん、頭の中はこんな感じかしら？」

そう言い、空になったご飯茶碗を指差してくる。中身は空ってか、コラ。

確かに、ぼーっとしていた俺が悪いがストレートに言え、質が悪い。

「大変、兄さん。中身が出てるわ」

「味噌汁を指差すな」

目を大きく開き、口に手を当てる姿はムカつくほどに白々しい。

かと思えば、こちらを哀れむ視線で一言。

「兄さん、信じてるから」

「殴るぞ」

間違いなく、シスコンじゃないと断言しよう。殺意のメーターが振り切ったし。

きついツツコミに、一層笑みを強めた妹に気付かれないように、俺はため息で殺意を押し出したのだった。

2話 怠い日曜の昼の朝食（後書き）

評価、メッセージ、共に有難うございます。緩い展開ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

3話 怠い日曜のおやつ又は昼ドラの時間

時刻は三時。

所謂、おやつの時間と呼ばれる時刻である。他にも呼び方があるのかも知れないが、あいにく俺はそう認識している。

さて、この時間帯でテレビの電源を入れると映るのは昼ドラだろう。ドロドロの、おやつの時間なんて霞むぐらいな。

「ドロドロしてるわね」

「ああ、ドロドロしてるなあ」

俺の肩に背中を預ける形でソファに座り、ぼそりと呟く妹。ついつい、同意してしまうほどドロドロしてるのだ。具体的には説明できないが、なんかもう怖いよ、女性って。

「ダメな男ね」

確かに、画面に映る主人公級の男性は誠実そうに見えてヘタレのようだ。登場する女性全てに良いように扱われ、その場しのぎのセリフで余計にドロドロさせている。だけど、胸が痛いのはなんだ。

「本末転倒ね」

なんだか、無性に部屋に逃げ込んで思い切り泣きたくってきた。けっして、俺に言っている訳じゃないと信じたい。

と、何か引つ張られる感触が。そちらに目をやるとなにやら神妙な顔つきの妹。いつになく真剣な眼差しに思わず、身を固めていると、

「例え、兄さんがそうであっても私だけは味方よ」

なんかもー、ぶん殴りたくなるセリフを真剣な面持ちで言ってくれた。

純度100%の嫌がらせだよ、お前の中では俺はどこまで堕ちてるんだ？

「出会う女性に良いように扱われて、言われるがままに甘いセリフを吐いて、いざ修羅場になると、自分は関係ありません、とでも言いたげな顔でその場に居るような落ちぶれた男性になっても、私は決して悲観したり、蔑みはしないわ」

「なら具体的に説明するんじゃないっ」

すらすらと、具体的かつ分かりやすい人生を語ってくれた妹に思わず、ツツコミを入れてしまう。

というか、長くて嫌に現実味があるセリフを淡々と真剣に語れるお前に感心してしまった自分を消滅させてえよ。

もつとも、俺のツツコミなど気にも止めていない様で、妹の視線は昼ドラだ。

コイツが、俺の心情を気にする訳がないのは知ってはいるが、何故か淋しい。

しかし、やられっぱなしというのも兄の威厳に関わるので、些細だが仕返ししてやろう。

相変わらずの無表情で、喋る事無くテレビを眺める妹の横顔を見つめる。ドロドロの展開に目を離せないようだ。

ちよつと笑みを浮かべたのが気になったが今がその時である。ターゲットは捉えている、距離は問題ない。心の準備はとうに出来ている。妙なテンションだが、今こそっ。

「ふうー」

「ひゃっ」

任務完了、目標の戦力は確かに削がれた。耳を押さえて飛び離れ、顔を真っ赤に染めているその姿からはつきりと見て取れる。

要は、妹の髪から覗いていた耳に息を吹き掛けただけ。何故か、耳が非常に弱い妹の弱点を的確に突いた、俺の勝ちである。

仕返しが小さいとか、ただの変態じゃんとかそういうツツコミは受け付けていないからあしからず。

さて、飛び退いた妹は依然として顔は真っ赤で、何やら言葉が出ないのかパクパク口を動かしていた。素晴らしい威力である。

新鮮な表情も見れた事だし謝ってやるかな。

自然と顔がにやけてしまうのを、極力、押さえながら妹に声を掛けようとしたのだが。

「ま、まさか」

顔は赤いままだが、愕然とした表情で呟かれる。そして、ふっと視線をさ迷わせ、

「兄さんが耳フェチだっぷっ」

アホな事をほざいたので、傍にあったクッションを思い切り投げつけてやりました。

3話 怠い日曜のおやつ又は昼ドラの時間（後書き）

兄妹の容姿が触れられていませんが、次回にて書きますのでご容赦ください。さて、なんとか一日一更新が続いています。なんちゅーか、奇跡？

でわ、次回の後書きで。

4話 怠い日曜の就寝前

何時の間にやら夜もふけ、そろそろ就寝の時間が近づいてきた。

時刻は十一時前、あの後、クッションを投げてやった後に妹が反撃してきた為、応酬合戦になってしまい、凄まじく疲れたので今日は早めに寝る事にしよう。

明日から、学校だし。学生の本分は学業です。

「で、俺は寝るぞ」

人様のベット上で雑誌を読みふけている妹に進言する。涼しい顔で読んでいるのがムカつく。

「兄さん、まだ十一時にもなっていないじゃない。学生の本分は夜更かし、遅刻の繰り返しよ」

真面目に学業を取り組んでいる学生たちに喧嘩を売る発言を、寝そべった状態で告げる妹の将来が心配である。

その真面目な学生たちに自分は入ってはいないから、強くは反論できないが。

ともかく、このままでは俺の安眠が奪われてしまう。適当に構ってやるか。

「何の雑誌だ？」

「ファッション誌」

妹も女性だ。やはり、気になるのであろう。その面持ちは真剣である。

自分の部屋なのに突っ立って居るのも馬鹿らしいので、ベッドの淵に腰掛け、覗き込んでみる。

開いてあるページには、流行の服装を身にまとい、それぞれのポーズで写された男女。皆、笑顔で写るその姿は確かに似合っていた。ファッション誌だから当たり前か。

「兄さんは、こういった雑誌に載せてもらいたいと思った事はある？」

「唐突だな」

「会話なんてそういうものよ、質問だと特に」

何故か、諭されてしまった。というより唐突な発言を行うのは妹であって、断じて俺ではない。

いかん、危うく丸め込まれる所だった。

「そういう事において。さっきの質問だけど、俺は無いな」

そこまで告げると、妹が雑誌から目を離し、こちらを見てくる。非常に驚いた顔で。

これはあれかな、ケンカ売られてると解釈していいのか？

しかし、ここで早合点する訳にもいかなないので聞いてみるとしよう。

「お前な、俺の事をなんだと思ってるんだ？」

目を逸らされる。

僅かな希望なんて絶対に信じるか、この野郎。

自分の容姿ぐらい把握しているつもりである。ボサボサに延びた髪に、吊り上がった目尻、目付きが悪いと注意される事も多々あった。身長は高校の男子生徒平均なみ。体格はやや細いので、会う人に心配されてしまう。そのおかげか、よく食物を貰えるので、この点だけは差し引きゼロかも知れない。

とにかく、この容姿でファッション誌に掲載されようとは微塵にも思っていない。言ってて、虚しくなってきた。はあ。

反論する気力もつき、ふと、元凶の妹を見るとまたもや雑誌を読んでいた。

今更だが、自由すぎやしないか？妹よ。

「お前はどうかんだ？」

手持ちぶさたになってしまい、何気なく聞いてしまう。妹ほどの容姿なら、街を歩くだけで声を掛けられそうだが。

「私は、無理よ」

だが、返ってきたのは想像していたのとは、まるきり違うものだった。

「友達にも言われたのだけど、私は無愛想だし」

愕然とする俺など気にしていないのか、少し頬を染めて、照れ臭そうに話し始める。

ここで、愕然してしまった理由ついでに語らなければならないだろう。

我が妹、間宮　かなめは間違いなく美人の部類に属する。兄としてのひいき抜きにしてもだ。

腰まで伸ばしている艶やかな黒髪に切れ長の瞳、だいたいは眠そうな半眼だが、置いておく。

体重までは恐ろしくて聞けないが、身長は俺と同じか少し低いくらいだが長身。華奢に見えるが、スタイルは良い。生憎とスリーサイズは知らないけど。

今でこそ犬がプリントされたパジャマを着ているが、何を着せても似合うのは間違いない。

もし、俺が流行の服装を着たとしても、頑張ったんだね？と言われるのが関の山だろう。

なんだか無償に腹が立つてきた。妹に嫉妬なんかしてないぞ、俺。

「そういう訳だから、私は無理よ」

と、聞こえてきた方を見ると頬の赤みが少しばかり残るかなめの顔。いかん、全く聞いてなかった。

取り敢えず、頷いておく。かなめの目付きが少しばかり恐いのは考えないでおこう。

「兄さん、聞いてたの？」

「ごめんなさい、聞いてませんでした」

即座に謝る。

兄としての威厳など年を重ねるごとく無くなるものだ。

かなめの目が、更に細くなってきた。美人に睨まれると予想以上に恐いよな。

馬鹿みたいに現実から逃避していると、ふっと、かなめの目尻が柔らかいそれに変わった。

「私も寝ようかしら」

そう宣言しつつベッドから起き上がり、ドアへと向かっていく。ただ、呆然とそれを見送る事しか出来ない俺。助かったのか？

「私は、どんな兄さんでも好き。もちろん、昔からね」

爆弾を残して、かなめの姿がドアの向こうへと消えていく。

後に残ったのはこの上なく間抜けな顔をしているであろう俺だけとなった。

一体、なんなんだよ。

4話 怠い日曜の就寝前（後書き）

少し、長くなってしまいましたが、ようやく二人の容姿と名前が書
けました。

次回からは学校編です。緩

い展開に拍車をかけるとは思いますが、よろしく願います。

5話 登校時、呆れる兄と照れる妹

見上げると雲一つ無い空。寝呆けきつた頭には少し辛い太陽の光。あちらこちらで聞こえてくる挨拶の声。通りには、俺たちと同じ学生や仕事に出かける方々の姿。そろそろ、行こう。

振り返った先には涼しげな顔の女性が立っている。俺が彼女に笑いかけると

「いつてらっしやい」

微笑み付きの挨拶を送ってくる。その言葉に頷き、俺は流れ行く人々の中に加わるのだった。

「兄さん、何か言ってくれないと悲しいのだけれど」

知った事か。勝手にボケてきたのはお前だ。

寝呆けた頭でツツコム気力は全く無い。朝から疲れるのは勘弁してほしいので、かなめのボケには極力、反応しないようにしよう。

規則的に通りを進む。後ろを着いてきているであろうかなめは、諦めたのか静かだ。

しかし眠い。静かなのは良いことなのだが、黙っていると眠くなってきたしまうもので、

「そついや、鍵は閉めてきたんだろうな？」

先程の決意はどこかに捨て、つい話し掛けてしまふ。だが、返事が無い。着いてきてないのか？

と、肩を叩かれる。さっきの事をまだ拗ねてるのだろうか、回りくどい奴だ。

振り向こうとした先には、指。その先には何処か嬉しそうに目を細めたかなめの姿。

考えている間に、かなめの人差し指が俺の頬に当たる。コレをされると慥然としてしまうのはなんでなんだろうな？

「何がしたいんだ？」

答える気は無いのか、当たっている指をグリグリと動かしてくる。

それが答えだと言わんばかりに。

抵抗しないかぎりするつもりか、お前は。

癢に触るのと、往来の目が気になるのですぐさま止めさせる。文句の一つでも言うかと思っていたが、その表情は満足気で、トコトコと俺の横に並んできた。

「兄さん、ボケを流してはダメよ」

「今更、蒸し返すか？」

我が妹ながら読めない奴なのは分かっていたが、こつも如実に表されると困るばかりである。

まあ、そのあたりは流してしまえば良い。かなめとのコミュニケーションをとるために必須だ。少しの決断力と情性、後は諦めとかそ

ういう感じなモノを駆使すれば出来るから。
取り敢えずはかなめの質問に答えてやるとしよう。

「朝から漫才をする必要があるか？」

質問で返してしまったが、しごく当たり前な答えを言ったと思う。
が、かなめに通用する訳もなく、思い切り嘆息されてしまった。

「円滑な人間関係を養うためには必須なの。兄と妹との漫才なんて
当たり前だわ」

表情こそ真剣そのものだが、言っていることは無茶苦茶である。かなめの脳内では世界中の兄妹が出かけに漫才をしているのだろうか？一度、頭の中を覗いてみたいよ。

どうしようもなく呆れ果てているのを肯定と受け取ったか、一つ頷き、眠そうな半眼でこちらを見てくる。質問をはぐらかすつもりだったんだが、バレてみたいだな。
面倒だが答えるより他は無いようだ。

「学校の制服を着て、登校の準備ができてる妹に見送られてもツツ
コミを入れる気がしなかったし、なにより寝呆けててお前のボケに
構う暇はなかった。というか、構って欲しいならちゃんとさええ」

途中で妙なボケを入れられぬように、一息で告げてやる。ちよつと
間が抜けた表情をしているかなめが可愛かったりしたが、異次元に
でも葬っておこう。

やがて、ぽかんと口を開けていた事に気が付いたのか、取り繕うよ
うに表情をいつもの涼しげなソレに変えた。頬が赤く染まっている

ので無駄な行動となっているのには気付いていないようだ。

「顔、赤いぞ」

それでも忠告してやると、急に歩のスピードを早めて、十字路を曲がって行ってしまった。

どちらにせよ、曲がらなければ学校に辿り着かないので俺も続いて曲がる。

「何してるんだ、お前は」

曲がった先には少し俯いて立っているかなめの姿。
そしてボソリと、

「兄さんに迷子になられたら困る」

頬の赤みが残った状態で呟く。それが照れ隠しなのか、いつものボケなのかは定かではないが。
なんとなくム力ついたのは確かである。

5話 登校時、呆れる兄と照れる妹（後書き）

なんだか、二人のキャラが定まっていないうな。ダメだなあ。

次は新キャラ登場、です。

きつと（汗）

6話 登校時、天真爛漫な人と妹の関係

あれから、歩を進めることに周囲には学生たちの姿が増え、ちらほらと見知った顔も現われてきた。声を掛けてくる者に適当に返事をしつつ、隣を歩くかなめに視線を移す。

出掛けの時に比べると妙に静かなのだ。口数は昔から少ないのだが、どうも調子が狂う。

癢に触る事でもしたのかと、表情から読み取れないか試みたが思い切り顔を逸らされてしまったので断念。俺、何かした？

変な空気を感じながらも歩くと、前方に学校に通うためには避けて通れない難関、長い上り坂が見えてきた。その長さはおよそ二百、その傾斜は最初こそ緩やかなものだが上るにつれ徐々に角度を厳しくなっている仕様だ。

『人生はこの坂の様に上るにつれ厳しいものだが、上り詰めた先にはきつと君たちが追い続けたモノがある』とは、校長の談。

しかし、もっぱら支持されているのは『ウチの学校を建てた奴は相当なドSだったに違いない、もしくは単なるバカか』というモノで、もちろん俺も後者派。

「かくなちゃんっ」

その声到我にかえる。
いかん、ぼつとしてた。

だが、辺りに目をやっても声の正体の検討がつかない。仕方なく、かなめに聞こうと視線を移すと、

「に、兄さん」

顔を真っ赤にさせ、助けを求めるように手をこちらに差し伸べる姿。一つ、可笑しい点を述べるならば、かなめの腰には満面の笑顔で抱きついている背の低い女子生徒が居る事。

「美鈴ちゃんか」

「あー、なんですか？そのおざなりな感じは」

そう可愛らしく頬を膨らませる姿はハムスターを連想させる。

彼女の名前は、実栗^{みくり} 美鈴^{みすず}。いついかなる時も元気で天真爛漫を全身で表す少女だ。肩で切り揃えられているやや栗色の髪には、トレードマークと豪語しているヒマワリの形の髪留め。分かりやすい子である。

「気にするな」

ぽんと頭に手を乗せて謝るとくすぐったそうに目を細める。その姿は子犬をも連想させ、何気なく頭を撫でてやる。

「えへへ」

先程の膨れ面は何処へやら、嬉しそうに微笑んでくる。正直に可愛いと思ってしまったが、口にすると後が大変な事になりそうなので止めておこう。

「改めて、お早よう」
「お早うございますっ」

撫でていた手を離し、挨拶すると、満面の笑みで返された。あまり、感情を表に出さなかなめとは真逆な美鈴ちゃんだが、本人たちの仲はとても良い。

現在、美鈴ちゃんがかなめに抱きついているのは二人の挨拶のようなモノ、とは美鈴ちゃんの談だ。ちなみにかなめに聞いたら否定された。顔が真っ赤だったから恥ずかしがってただけなのは一目瞭然だったけど。

しかし、この状況はとても珍しく感じてしまうのは何故だろうか。我が妹に抱きついていて美鈴ちゃんが、何やらかなめの名前を連呼しながら嬉しそうに腕の力を強めている事は仲の良さ伺えるだけだからどうにも思わない。

とすると、やはりかなめの方だろう。何時も涼しげな顔で俺に意味不明なボケと行動で疲れさせる事で楽しむかなめが、今はまるでその面影すら無い。

顔は真っ赤に完熟し、いつもの眠そうな半眼にはうつすらと涙が溜まっていて、何か言葉を紡ごうと口をパクパクさせている。

すげえ、新鮮。

しばらく放っておきたい、衝動に襲われるが、気弱になった瞳と目が合ってしまった。

仕方ない、助けてやるか。ちょっと可愛いと感じてしまっても仕方ないよな？

「あー、美鈴ちゃん。そろそろ離してやってくれ」

俺の言葉に既に満足していたのか、素直に離れてくれる。傍らで涙目のまま淒く睨んでくるかなめは気にしないようにしよう。

かなめから離れた美鈴ちゃんは、軽やかに俺に近づいてきた。その表情は先程の笑みを保ったままだ。自然と俺も笑みになるのを自覚しながら言葉を待つ。

「先輩、予鈴まで後五分しかありませんけど、大丈夫ですよね？」
そういう事は早く言おう。

6話 登校時、天真爛漫な人と妹の関係（後書き）

ギリギリでした（汗） ようやく、三人になりました。 元気な子
です。 それでわ、また次回。

7話 HR、女神の様な副担任と疲れてる兄

多大な体力を消費したお陰で、どうにかHRの時刻に合った俺は、自身の机の上で己の愚かさと非力さを呪っていた。
美鈴ちゃんとはともかく、かなめまで足が早いとは。

片腹を押さえながら走る俺を尻目に颯爽と校内へと消えた二人は間違いない間に合っただろう。『私、遅刻しそうになってない』とでも言いたげに涼しい顔で机に座っているかなめの姿が脳裏に浮かぶ。
なんだ、この敗北感。

「さて、知つての通り小深山先生はしばらく旅行に行かれる為、今週は私がHRに参加しますからね」

その声に教卓へと顔を起こす。立っているのは紺のスーツを華麗に着こなす、一人の女性教師。春日井^{かすがい} 志乃^{しの}、俺が在席する二年三組の副担任だ。ちなみになめと美鈴ちゃんが在席する一年一組の副担任も兼任している。

「えー、学校からの連絡は、特に無し。アタシ個人の事が知りたいなら遺書を書いて聞きに來てくださいね。後、質問はありますか？」
良く透き通る声でさらりと恐ろしい事を告げるその美貌。肩甲骨の当りで切り揃えている黒髪は、毛先がくせ毛でカールして上を向いている。

たれ目で、その表情は柔和な笑みを絶やさない。黙っていれば、正

しく女神の様な容姿なのだ。

だが、天は二物を与えずとは良くいったモノで、性格は悪い。話しているとき、テンションが下がり最後には謝らなければ会話が終了しなくなってしまうのだ。よく考えれば、悪いのは会話の節々でさらりと毒舌を入れる春日井先生なのであって、自分では無いのだが。

今では、一点の曇りも無い柔和な笑みが恐怖を倍増させているのはつきりと分かる。

もっとも、既に一年以上の付き合いになる我がクラスメイトたちにはあまり通用していないが。

「小深山先生の旅行はどれくらいですか？」

そう投げ掛けるクラスメイト。出席簿を弄んでいた春日井先生は少しだけ考える素振りを見せ、

「長く待ち望んでいた春でしょうし、二週間。いえ、頑張りすぎて長引くかも知れないですね」

女神の微笑みで最低な返事をしてくれた。

確かに、今年で三十五歳になる我らが担任、小深山先生には長く待ち望んでいた結婚だろうが、それは本人が良く知っている事で言うてはならない一言である。後半のセリフは人としてダメだと思う。下ネタじゃん。

恐らく周りのクラスメイトたちもそう思ったに違いない。場は静寂に包まれ、なんとも形容しがたい雰囲気支配されてしまった。質問した女子なんか石化してるよ。

そして、それらを生み出した元凶、春日井先生は変わらない微笑を
少しかだけ強めているだけである。

これらの事をただ微笑むだけでやってのける春日井先生だが、生徒
たちからの人気はあるらしく、一部の生徒集団が作っている『校内
美男美女ランキング』なるものでは上位に位置付けてるようなので、
世の中とは良く分からないものである。補足だが、我が妹と美鈴ち
ゃんも上位らしい。

と、やや擦れたチャイムが響き始めた。それと同時に、教室内の妙
な雰囲気も消えたようで周りから安堵のため息が聞こえてくる。

だが、春日井先生には全く関係なかった様で、唇を少しだけ釣り上
げ、

「さっき、アタシが言った事でエロい事、考えた人は何人くらい居
るんでしょうね？帰りのHRの時に聞きますから、そのつもりで」

またもや場を凍り付かせる言葉を終了の挨拶とし、出席簿を片手に
優雅に教室を去っていくのであった。

ランキングで春日井先生を推した奴らは、本性を知らないと思う。
間違いない。

7話 HR、女神の様な副担任と疲れてる兄（後書き）

どうも、当初のころに比べて緩くないような。

またもや新キ

ヤラ登場。女性ばかりだなあ。

それでわ、また次回。

8話 昼食時、無邪気な親友と主夫な兄

昼である。

確認するまでもなく、教室内のクラスメイトたちは、机を寄せ合い持参した弁当を広げる者や、各々の友人同士で声を掛け合い食堂へ向かう者などで、思い思いの昼休みを満喫し始めている。では、なぜ分かり切っている事を確認しているのか、と問われても答えにくい。

そついう気分は誰にしろあるものだ。

「昼飯の時間だぞつ」

声を掛けられた方を見ると、一人の男子が立っていた。何が楽しいのか笑みを浮かべているその男子の名は、葛城^{かつらぎ}京也^{きょうや}、四年前、つまり中学生の時に知り合い、妙に懐かれてしまったのがきっかけで、その後も偶然なのか同じクラスが続き、四年の付き合いになる友人である。

顔付きは高二の割には幼く、丸い瞳に小顔で、笑う姿は正しく無邪気なモノだ。身長が低い事もあってか、上級生の女子生徒たちには人気がある事を聞いたことがある。ただ、本人は自分の容姿が不服らしく事あるごとにシヨックを受けている様。

実際、こいつから髭を剃ったことが無いと言われた時にはなんとなく気苦労が分かった気がしたものだ。

「要っちは弁当？学食？」

『要っち』。この上なく恥ずかしい愛称は、出会った当初から言わ

れ続けている忌まわしき呼び名だ。

思わず、睨み付けてしまいが、相変わらずの笑顔を見るかぎり、俺の呼び名は『要っち』のままなのだろう。当に諦めているのもあるけどな。

「弁当だ」

素っ気ない答えでも京也には関係無いようで、輝かんばかりの笑顔を残して自分の席へと駆けていった。

その突飛な行動に眉を潜めてしまふのを感じつつ、京也の行動を見守る。

まず、鞆を漁り猫柄の包みを取り出すと、またもや輝かんばかりの笑顔を浮かべこちらへと走ってくる。包みと椅子を持って。オチが読めた。

「がふっ」

案外、教室というのは狭いものだ。生徒分の机に椅子、机に掛けている各々の鞆やバッグなどで自然と行動を制限されてしまふ。その為、安易に動き回ろうとするならば、それ相応のリスクを伴う。結果としては机の足に、小指をぶついたり、華麗に避けようと足をもつれさせ、派手に転けたり。自分に返ってくることが多い。

しかし、京也は違った。走るという行為は自然と腕を振る形になる。素手ならばまだしも、椅子が加わっているのならば既に凶器だ。そして教室内には食事や友達と話している者が居るという事。あはれ、クラスメイトAは無邪気な椅子の強襲を鳩尾に受け、その場に崩れ落ちた。

そのすぐ傍で彼と談笑していた男子は、茫然と崩れ落ちた彼を見下ろしている。天災だと諦めるのを切に願うばかりだ。

「今日は、オレも弁当。一緒に食べようなっ」

つい今し方、無力なクラスメイトを一撃で沈めたとは思えない無邪気な笑み。恐らく、気付いていないのだろうが。

その容姿に似合う、猫がプリントされた弁当袋を俺の机の上に置くと、いそいそと包みを開き始めた。感触すら無かったのか？

「おつ、おにぎりに卵焼きだ。エビフライもハンバーグも旨そうっ」

なぜか、俺一人だけ取り残された様な気持ちに。結果論からすれば、俺は関係ない。だけど居たたまれないこの感情はなんだ。

目の前では、弁当に箸をつけ始めている京也の姿。好物ばかりの品数にとろけた表情だ。

悩んでいる自分が馬鹿らしくなったので、胸につかえた疲労感をため息で押し流しつつ、鞆から弁当を取り出す。ちなみに俺と妹の弁当は我が手作りである。かなめも今頃は友達と食べている頃だろう。

「ん？要っち、昼ご飯たべないのか？」

頬一杯に弁当の中身を詰め、器用に尋ねてくる京也。何故か、今朝の美鈴ちゃんと重なって見える。

ああ、二人とも似てるからだ。性格ともに体型も。

「しかしさあ、要っちの弁当って何か堅苦しいよ」

「人の弁当を見るなり、それか？」

何やら、不満げに言ってくる京也を多少睨んで自分の弁当に目を落

とす。

鶏ロールの照り焼きに一口大のオムレツ、いんげんの胡麻和え。ちよっとした隙間には野菜を詰めている。我ながら頑張って作った弁当だ。リンゴのウサギが可愛いじゃないか。

「なんていうか、お母さんのお弁当って感じ」

「殴るぞ」

「オレの弁当なんか、大好物ばかりつ。姉ちゃんは分かっているな」

そう言っつて、再び自分の弁当に箸をつける京也を尻目に、京也の姉は弟の好物は子供が大好きなメニューと思ってるんだろう、と確信めいたモノを感じつつ、自分の弁当に箸をつけ始めたのだった。

8話 昼食時、無邪気な親友と主夫な兄（後書き）

字数を平均的にしたいものです。

新キャラ三回

連続。收拾がつかなくなる前に考え直さなければ（汗）

それでわ、また次回。

裏8話 屋上にて、素直じゃない妹と素直な子（前書き）

妹視点のお話です。

裏8話 屋上にて、素直じゃない妹と素直な子

見上げれば輝く太陽。

朝に比べ多少は雲が出ているけれど良い天気である。耳を澄まさずとも校内の学生たちの声が耳に届く。

春の陽気を感じながら私と美鈴は学校の屋上にて昼食を取っていた。

「かなちゃんのお弁当って先輩が作ってるんだっけ？」

「そうよ」

すぐ隣で自身のお弁当を食べながら問ってくる美鈴。お弁当の包みが、黄色一色なのがとても彼女らしくて似合っているな、等と今更な事を考えつつ自分のお弁当の包みを開く。
今日も美味しそう。

「わっ、凄く美味しそう。先輩って料理上手だね」

彩り鮮やかな中身を物欲しそうに物色される。ヨダレが出てる、と指摘すると慌てて黄色の包みで拭き取り、恥ずかしそうに食事を再開。

「顔、真っ赤よ」

注意せずとも本人には分かっていただろうけど、心優しい私はあえて指摘した。途端、吹き出す美鈴。その声と動作については、本人の名誉の為、脳内でカットしておこう。
女の子だもの。

「あ、ウサギ」

改めて中身を確認すると、思わず笑みが浮かんできってしまう。前日の夜、リクエストしていたリングゴが、ウサギの形に切り飾られてこちらを見上げていたからである。

兄が真剣にリングゴと向かい合い、ウサギの形に整えているその姿を想像してしまい、頬が熱くなってきた。隣で、いまだむせている美鈴に気取られてしまわない様に、軽く咳払いをして、私は兄が作ったお弁当に箸をつける。

今日も美味しいわ。

気管にでも入ってしまったのか、止まない咳の音が少しばかり耳障りだが、気にせずお弁当に舌鼓を打つとしよう。

「っ。かつなちゃんっ」

「にゃっ」

急に復活を遂げた美鈴に、声を上げられ、体を揺さ振られた為、妙な声を出してしまう。思わず、顔が熱くなってしまうのを自覚してしまうが、それよりも大変な事態が起きてしまった。まさか、声を掛けられることはあれど、体を揺さ振られる事までは想定していなかった私は、大切なおかずを味わおうと箸で取っていたのだ。

ゆっくりと落下してゆく鶏ロール、私にはただそれを見つめる事しかできない。中には青じそと梅肉が挟まれ、醤油の芳ばしさと梅肉の酸味ご飯に良く合うのだ。

それを、それを。

「美鈴」

とコンクリートに転がり落ちたソレから目を離し、何やら憤慨した様子の美鈴へと顔を向ける。

次の瞬間にはその表情が強ばり、小さく息を飲み込む様子が見て取れたが、私にはどうでもいい事だった。

「か、かな、ちゃん？」

まるで怯えているかの様に目尻に涙を浮かべ、口角を引きつらせる美鈴に何時もの笑顔は無く、たどたどしく私に声を掛けてくる。可愛そうに。

「何かしら」

ただ、返事を返しただけと言うのに彼女の表情は更に引きつった。その態度が少し面白いので続ける事にしよう。ちよっとだけ癪に触ったのもあるけれど。

「ここに落ちているのは何かしらね？」

落とされてしまった私のお昼ご飯を指差し、ゆっくりと問い掛ける。美鈴はしばらくの間、私の顔と落ちているおかずを見比べ続けた。私の顔を見るたびに息を飲んでるのが非常に気になるが。

やがて、美鈴の顔から血の気が引いていくのが、青ざめ始めた事で分かり、冷や汗らしきモノが額に一筋。やっと、理解したようね。

「う、ごめんっ。かなちゃんっ」

両の手を合わせ、すまなさそうに頭を下げる美鈴の姿、彼女の利点

は素直な所だ。ケンカをしても、自分の非を認めて先に謝ってしま
うその性格は、クラスメイトたちにも彼女の美德として認識されて
いる。

実の所、私もそんな美鈴の素直さが好きなのだ。

到底、恥ずかしくて言えないけれど。

ちらりちらりと瞳を動かし、こちらの様子を伺う仕草に毒気を抜か
れ始めたのを自覚してしまった私は、小さく息を押し出した。

元は私が悪いのだし、許してあげようかしら。

「かなちゃんが好き先輩が作ったお弁当が食べれないなんて、
かなちゃんには辛すぎるよね・・・ごめんね、かなちゃん」

口は災いの元とはよくいったモノである。私は自分の顔が真っ赤に
染まったのを感じながら、きょとんとこちらを見やる美鈴の額に目
がけて、力の限りデコピンを放ったのだった。

裏8話 屋上にて、素直じゃない妹と素直な子（後書き）

なんと1000アクセス突破。こんな緩い小説を読んで頂いて感謝です。 そういうわけでは無いのですが、今回のお話は妹視点でした。如何だったでしょうか？

それでわ、次回は9話で。

9話 体育、白熱する試合とほのぼのな二人

澄み切った青空に笛の音が響き渡る。その時を待ちわびていた二人の男子がほぼ同時に跳ぶ。

標的は高く投げられたボールだ。

僅かな差で左側のフィールドに居た男子がボールをキャッチしたようだ。ボールを取った側のコートに少しの歓声が広がる。一見、有利に思えた左側のコートだったが数秒後に悲鳴を響かせた。

「勝負の世界は厳しいわね、兄さん」

その声に釣られて左を向くと、同じように観察していたのだろう、上下ジャージ姿の我が妹が同じベンチに腰掛けていた。

今日、最後の授業となる体育の内容は一年一組と我がクラスによる、合同ドッジボールだ。高校生になっても、と不満を洩らしていた両クラスだが、試合を重ねるにつれ楽しくなってきたのだらう、現在は白熱した試合を行っていた。あ、ひとり倒れてる。

「青春だな」

「青春ね」

何か、可笑しい言葉が出てしまったが気にしないで欲しい。早々に試合で負けてしまったのでテンションが低いだけである。

視線の先で行われている試合は授業とは思えないほど盛り上がって

いる。怒号や歓声、響き渡る笛。ボールを当てられ齒痒さにグラウンドを叩く者。帰還した者と握手を交わし、その結束をより強くする者たち。

間違いないドッジボールの授業なのだが、クラスメイトたちのテンションがソレに適応していない様にも見て取れる。

あれ、ウチのクラス？

「美鈴だわ」

そう呟くかなめの視線を追うと背の小さな女子が、いままさにボールを投げる瞬間だった。

小さな体を目一杯に使って投げられたボールは相手チームの一人に見事に的中。うなだれつつ、コートから出ていく相手を見てか、美鈴ちゃんが盛大にガッツポーズを決めた。

あんなに飛び跳ねちゃって。あ、退場してるよ。

「バカ」

ため息で押し流した様なかなめのぼやきに、思わず笑ってしまう。不思議そうに見てくるのを手を軽く振ってやり過ごすと、再度、試合へと視線を移した。

素直じゃない事で。

ふと、大きな歓声が耳に届く。グラウンドで行われている試合を注視すると、何やら小柄な男子が来るボール全て避けて回っている様で、彼がボールを避ける度に歓声が起きている。

よく見ると、その男子は京也の様だ。真正面から来るボールは当然のごとく避け、相手方のフェイント混じりの攻撃も驚異の身軽さで避けきっている。

捕らないと試合が進まない事を理解しているか、甚だ疑問だが。

「そういえば」

何を思い出したか、かなめの呟きが聞こえた為、目をそちらにやる
とこちらを眺めていた。何処となくその面持ちが真剣で、つい身構
えてしまう。

「兄さんに一つ言わなければいけない事があるわ」

「どうしたんだ」

先を促すと、伏し目がちになり、両の手をもぞもぞと動かし始めた。
どうやら言いにくい事の様で、薄らとその頬に紅が差しているよう
に見て取れる。

「お、お弁当の事」

小さく届くその内容。

弁当の事、と言われ浮かんだのは不味かったのかという不安と、か
なめの嫌いな食材をこっそりと入れた事が発覚した、の二点。自然
と流れる冷や汗をさり気ない動作で拭き取り、次の言葉を待つ。
ばれてたら逃げよう。

「ウサギ、有難う」

だが、発されたのは意外な一言。限界点だったのか、一瞬でその顔
は真っ赤に染まるのが見え、顔を下に背けてしまう。少し、茫然と
してしまつたが理解できた今、俺は流れ込んできた暖かい感情に任
せるように笑みを浮かべ、照れ屋な妹の頭を撫でてやる。

「くすぐったい」

非難している様で弱々しい声。ちらりと覗く耳は真っ赤で、彼女の顔も同じ色に染まっているのを想像させた。何時もの態度はどこへやら、されるがままのかなめから視線を外し、グラウンドの方へと移すと、一際長い笛の音。

同時にコート側から跳びだしてくる京也の姿。続いて我がクラスメイト数人の姿が。

「なんだ？」

近づくにつれ、彼らの表情が鬼気迫るものと分かる。というより、京也は何かから必死に逃れるような。まさか、あのバカ。

数秒後、凄まじい勢いで目の前を駆け抜けていった一群の後方はそれぞれがボールを持っていた。

結局、試合は終わらなかった様だ。授業終了を知らせる鐘の音が、何処となく哀しげに鳴り響くのだった。

以外に体力あるんだな、京也。

9 話 体育、白熱する試合とほのぼのな二人（後書き）

一日一話と豪語しながら守れなかったこの体たらく。情けないなあ、自分。 いつか、取り戻さなければ そ
れでわ、次回にて。

10話 下校前、悪魔の様な副担任と帰れない兄

刻々と下校の時刻が近付き、窓越しに見える景色は茜色に染まりつつある。周囲のクラスメイトたちは疲労困憊している様で一様に机に突っ伏していた。一つだけ主を失った席があるが、それについて触れるのは止めておこう。
自業自得。

と、教室のドアが開く。入ってきたのは微笑む春日井先生その人である。その笑みがいつもより深く見えてしまうのは錯覚だと思いたい。

「皆さん、席に着いてください」

その鶴の一声によつて、席に着くクラスメイト。もとより、席に突っ伏している者が過半数だったため、さしたる時間は掛からなかった。

「出来るなら、すぐにでも皆を帰させたい所なのですが。少し皆にやって貰いたい事があります」

微笑みだけは天下一品なその言葉に、教室内に落胆のため息付きで嫌な雰囲気漂い始めた。最後の授業で制裁を加えなければならなくなつた者たちには更に辛いのだろう。どの顔も疲労感に満ち、上げていた顔を再度、突っ伏させる者が。まあ、春日井先生の話は基本的に聞き手を疲れさせるのばかりだし。

「簡単なアンケートですから。ぱぱつと終わらせましょう」

そう宣言し、春日井先生の手元に置いてあった用紙が配られ始めた。最前列の者に手渡され、ソレを後列の者に渡す。見慣れた光景とともに用紙が配られてゆく。

ここで、俺の席について説明しておこう。四十と並べられた机。その四隅、教卓より最も遠い際後部の窓側の席が俺の席である。隠れて何か行うには最も適した場所なのだが、それ故、教師の注意も自然と集まりやすい場所でもあるのだ。駆け引きを覚えるには最良の場所かも知れないが。

そういう訳で、配り方にもよるがテスト用紙など、学校からのお知らせなどといったモノを受け取るには必然的に最後となる。ぼうつと待つのも気が引けて、周りを見回していたのだが。

「うわー・・・」

悟ったような声が時折、漏れてくるのは何故だろう。それに伴い、春日井先生の微笑みが嬉しそうに変化してゆくのが物凄く恐い。言い様の無い不安が押し寄せてくるが春日井先生の笑みが、逃がさぬ、とばかりに強烈なオーラを放っている為、諦めざるをおえないようだ。

「はい・・・」

哀しげな声音と、悟りきった瞳に失笑に歪む唇の絶望の表情と共に、いよいよアンケート用紙が回ってきた。

「うわぁ」

配られた紙、その内容はひどく簡潔で分かりやすく、皆に悟りを開

かせるには十分すぎるものだった。

『今朝のHRにて、エロい事を連想した人はYES、していない人はNOに。を付けてください』

この教師、ほんと性格ねじまがつてるよ。

「それじゃ、皆。ぱぱっと書いてくださいね」

につこりと笑う春日井先生、もといDS教師の一言。勿論、ペンが走る音は無く、クラスメイトたちは固まったままである。よもや、実行するとは誰も想像できなかったのだろう。というか、仕事中に何やってんだ。

誰も動こうとはせず、ただ時間ばかりが過ぎてゆく。

やがて、痺れを切らしたのか、春日井先生の眉が若干よせられ、小さく舌打ちする音が。

「未記入者は、アタシの独断と思い込みでYESにしますからね」

さらりと最低にして最悪な発言をしてくる。クラスメイトたちはただ哑然とするばかりだ。誰もが、アンタしだい以て答え変わるじゃん、と思っっているだろうに春日井先生の表情は涼しげである。

教職員ってセクハラで訴えても問題ないよな。

10話 下校前、悪魔の様な副担任と帰れない兄（後書き）

ギリギリでした。

急いで書くと駄文しか書けない、普通に

書いても駄文ですが。

それでわ、また次回で

11話 帰宅時、ホワイトボードと兄

すっかり日は暮れて、夕日が完全に沈むまで小一時間といったところか。ぽつりぽつりと灯りが漏れる近隣住宅、人通りは少なく、何処からか犬の遠吠えが届いてくる。周りの景色は朝方とはガラリと風貌を変えたように見えた。

あの後、全員がアンケート用紙に書き込むまで校内に拘束され、楽しそうに、俺を含むクラスメイトの恥辱に満ちた表情を堪能した春日井先生に対する処遇案を三十分ほど話し合った為、遅い帰宅になつてしまった。大部分は春日井先生に原因はあるのだが。

そして現在、俺は歩を止めて一軒家を見上げている。向かって左側の塀には『間宮』と刻まれた表札が、備え付けのライトによって照らだされている。薄暗くなってきた為、外観ははっきりと確認しづらいが、間違いなく我が家である。

本来ならば確認する事無く我が家の玄関を開け、中へと入るところなのだが、ある一つの異常がその決断を阻止していたのだ。

「ライトの故障か？」

先程から玄関の中、要は靴を脱ぐ所の照明が点いたり消えたりしているのだ。それも一定の間隔でだ。単純に電球が切れかかっているのならば、変則的になる筈である。だが、その電球は一昨日の夜に変えたばかりだ。

空き巣、とも浮かんだがあからさまに怪しい行動をする泥棒なぞ、

ただの変質者にしか過ぎない。なにより、我が家を含めた近隣住宅街にはそういった事に並々ならぬ正義感を持ってして阻止、または壊滅させる人が居るので空き巣は無いと断言できる。

「とすると、かなめか」

結局、考えが行き着いた先は我が妹の仕業。毎回、思い付きの言動に振り回される俺とした事が、見落としていた。

かなめの部屋の灯りが点いている事を確認し、玄関のノブを捻る。

「ただいまー」

出迎えてくれたのは、『お帰りなさい』と達筆に記された一枚のホワイトボードを片手に立つかなめの姿ではなく、非常に酷似した外見の一人の女性の姿。肩で切り揃えられた黒髪を一つに括って、黒のスーツに似つかわしくないフリルのエプロンを掛けた女性は、今だに照明の電源のON、OFFを繰り返していた。

「何してんの、母さん」

「面白いかな、と」

無表情に全てを台無しにしてしまった母、間宮まなべ 色羽いろはに呆れた視線を投げると、ぴたりと一連の動作を止めた。

何か、思うところでもあったのかホワイトボードに何やら書き始める。

『やっぱり、ベタな方が好み？』

眉を、少々寄せて真剣に聞いてくる母を素直に殴りたいと衝動的に思う。

大体、ベタな方とは『お帰りなさい、先に晩ご飯にする？お風呂にする？それとも』、的な事を考えているのだろうか。実行する方には勿論、される方にも相当な羞恥心を捨てなければ実行できないベタベタなセリフを？

「それ、本気で書いてるのか？」

「ええ」

自信たっぷりに答えてくる母の表情を見る限りでは本気だったようだ。

というか、ホワイトボード使え、とツツコミを入れたくなったが収拾がつかなくなりそうなので止めておく事にする。

俺の呆れを通り越し、哀れみを多分に含めた視線と表情に耐え切れなくなったのか、何やら掲げていたホワイトボードに書き込み始める母の姿。

ふと、思い出す。確か母は出張に行っていたのではなかったか？出掛ける前日に駄々を捏ねていた母の姿を明確に思い出した。子供のように口を尖らせ、ソファから頑として動かない母を説得したのだ。一週間ぐらいになるんじゃないかったか？

「要」

母の声に我に帰る。目の前には突き出されたホワイトボード。

『お帰りなさい、先に晩ご飯にする？お風呂にする？そ・れ・と・も・ワ・タ・シ？』

最後まで読み、ちらりと母の顔を見ると得意げに胸を張っている。そして俺は理解した。付き合うのが時間の無駄だったのだ。

俺は掲げられたホワイトボードを奪い取り、目の前の障害を張り倒して我が家へと歩を進めるのであった。

11話 帰宅時、ホワイトボードと兄（後書き）

同じ失敗を再度繰り返した作者に批判、お待ちしてます。

さて、要sの母、色羽が登場しました。妹と似た思想の持ち主です。兄の苦労が増える一方だなあ。

それでわ、また次回で

12話 親子と双六の悪意

軽快な音をたてスーツ姿の女性を模した駒が先へ進んでいく。行き着いた先にあるのは『用事を思い出し、二マス下がる』と書かれたマス。

少し眉を寄せ、今だにスーツ姿の母が同じ容姿の駒を下げた。

双六である。深い経緯があつたのか、恐らく無いのだろうが、夕食を済ませ、リビングにてぼうつとしていると、妙に楽しげな様子の母が抱えてきたのが発端である。

勿論、拒否した。しかし、人の話など聞かずに準備を進め始めた。

埒があかないと自室へ逃げ込もうとしたのだが、何時の間にやら背後に立っていたかなめに押さえ付けられ、押し問答をしている合間に、準備は完了してしまったのだ。

拒否すると悲しそうに二人で呟き始める姿に心が折れたのもあるのだが。

「私ね」

真剣な表情のかなめは宣言と共に握っていたサイコロを投げる。ちなみになめも制服姿である。クルクルと数秒ほど回って、出目は五。予想より大きい数字が出た為か、その表情を微かに綻ばせ、セーラー服を着た少女を模した駒を手を取った。

二人の駒が心なしか、当人に似ているのは気のせいなんだろうな。

「へそくり発見、二万五千円の収入」

現実的な数字である。本物より二分の一のサイズしか無いゲーム用の紙幣を、何故か俺の手元にある紙幣入れから取っていく。

「ちょっと待て。何故だ」

慌てて、その腕を掴み問うと、いつ見ても眠そうな半眼でこちらをじつと見て、自らが進めた少女の駒が置かれているマスを一指し指で叩き示される。単なるいつもの嫌がらせでは無いようだ。掴んでいた腕を放し示されたマスを見る。小さく、注意して見なければ見えない程度で一文。

『兄弟のへそくりです』

つづいてかなめに視線を移すと、仕方ない人と言わんばかりに肩を竦められる。何処となく様になっている仕草が妙にイラツとくるが、自身に暗示をかけサイコロを手取る。さっさと終わらせよう。

「あつ」

「あら」

出目は一。二人の呟きも手伝ってか、得体の知れない哀愁が心を支配する。心なしか、Ｔシャツにジーンズ姿の青年を模した駒から悲愴感が感じられる。

大丈夫、次があるさ。

気を取り直して駒を進め、マスに書かれた文章に目を通す。

『ドーベルマンに追われ、片足を食い付かれながらも一マス下がる』
なにコレ。

この際、一步進んで一步下がって意味が無いとかはどうでも良いでしょう。何故、犬が限定されているのだろうか。そして『片足を』

と言う点に凄まじい策略を感じる。

スリルをモットーに作られたのか？

「痛いとかそういう問題じゃないだろ」

「痛い」とかそういう問題じゃないだろ」
ぼそりと感想を伝えてくるかなめにきっぱりと返し、駒を元のマスに戻す。足を引きずっている様に見えるのは俺だけなのだろうか。

母の番。サイコロを両の手で握り、無表情ながらも真剣に顔の前で念じて振るった。出目は六。やや口角を上げた母によって、先へと進められる。願わくば同じ目にあってほしいものである。

真剣に駒の行く先を見つめる俺と、なんだか楽しそうに目を細めるかなめの視線。やがて、六マス先に辿り着いた。

『プレゼントを貰う。対象者は一万五千円をこのマスに止まったプレイヤーに渡す』

以外と普通であった。期待はずれに小さく舌打ちしたのは気付かれていない様だ。

ため息を吐き、次の番であるかなめに視線を移すと不思議そうに半眼をやや広げ、眉を潜めていた。

「兄さん、なにやっているの？」

非難じみた声音に、同じく眉を潜めてしまう。訳が分からず、母へと視線を移すとニコリと笑みを浮かべ、両の手をこちらへ突き出して、

「有難う」

感謝された。しばらく、その言動が飲み込めず固まる俺は笑みを崩さない母と見つめ合う。そして、気付いた。

母の駒が止まったマス。一見、普通のマスなのだ、かなめの駒が止まったマスの様な。

まさか、な。

「『長男からです』って」

読んでくれて有難う、かなめ。

そうなのだ。またしても、小さく続きが書かれていたのである。これは正しく策略に違いない、よほど兄の事が嫌いな製作者が居たのだ。今更だが、小さく書かれているその文章から、悪意がひしひしと伝わってくるのが分かる。

ケンカ売ってるのか、この野郎。

「要、早くして」

「兄さん、渋るのは分かるけどゲームなの。諦めが肝心よ」

淡々と告げてくる二人の言葉が、俺の殺意を確実なモノにしつつ、夜は更けていくのであった。

12話 親子と双六の悪意（後書き）

これにて学校編、または一日編が終わりです。字にすると長いですね。まあ、展開が遅いといわれればご尤なのですが。

さて、一日一話は何処へいったのやら無能な作者でした。また、次回。

13話 怒る妹、眠る母

生きていく中でどうにもならない出来事が、人生には起こりうる。

例えば、高級車と事故を起こした、許婚との結婚間際に逃避行をされた、一夜限りの間違い、等等など挙げれば限りが無い。それは必ずしも起きる事であって、人生に適度なスパイスを加えるモノなのだろう。どんなに衝撃的な出来事であっても、時が経つにつれ、自ずと笑い話になったり、教訓として自らの能力を伸ばす事になるのだが、現在進行形だと話は違う。まず茫然とする。次に周囲の様子を確認し、絶望か虚無感が押し寄せてきて、そこで初めて状況を飲み込む。

「かなめ、誤解されても仕方ない状況かもしれないが、誤解だからな」

部屋のドアを開け放った状態で、こちらを茫然と見つめているパジヤマ姿の我が妹にベッドに入った状態で弁解する。何故か、罪悪感が芽生えたりしたが、自身に間違いを犯した事実は無いので、黙したままのかなめをただ見つめるだけである。

と、軽く決して嫌悪感を感じさせない掛け布団が、ゆっくりと持ち上げられる感触。くるりとかなめから視線を放し、隣を見る。そこには、かなめとお揃いのパジャマ姿で、眠そうに目蓋を擦り、ベッドの上で腰を抜かしたように座っている母、色羽の姿があった。短く切り揃えられた黒髪が飛び跳ねている。

「要え」

寝起きの頭で思考能力が低下しているのであろう。舌足らずに俺の名を呼ぶと、ぽてんと再び横になった。どうしろと？

「兄さん」

刺のある声。

背中に嫌な汗が出始めた。そちらを向いたら後悔しそつだが、向かなくとも後悔しそつなのでかなめの方へと首を動かす。

そこにはかつて見たことの無い表情のかなめが居た。半眼は鋭く釣り上げられ、生来の目付きの悪さも相まって、視線で殺す、という例えが良く分かるほど。思わず体が震えてしまい、平静を保とうと深呼吸を試みたが擦れた息が漏れただけだった。

正しく、蛇に睨まれたカエル。恐ろしくて言葉を発することが出来ない。時折、夢でも見ているのか母の唸り声だけが緊張の最中に流れている。

は、話し掛けるか。

「かなめ、あの」

「黙りなさい」

些細な勇氣は一言で断ち切られてしまった。完全に黙る事しかできなくなってしまうた俺を真つすぐに睨み付けながら、徐々に距離を縮めてくるその様は、下手なホラー映画よりよほど恐い。

ついには鼻と鼻がくつつきそつな位置まで詰められ、ベッドに寝ている俺を跨ぐ状態へと追い詰められしまう。

「兄さん、聞く事にだけ答えなさい」

鋭い黒の瞳が揺らぐ事無く見つめている。

既に喋る余裕など無かった俺は首を、壊れた玩具の様にガクガクと肯定する。

夢に出そうだよ。

「どうして、母さんが此処に？」

凜とした問いに返すべく、昨夜のことを思い出してみる。

就寝前、母の姿は自分の部屋には無かった。母自身も、休みだから早く寝てそのまま寝過ごしてやる、とか矛盾しているような言葉を残して、俺より早く眠ったはずだ。自室へと入っていく母の姿も目撃したので、就寝時に一緒に居たという記憶は無い。

「知らんぞ」

自分なりに正直な答えを返したのだが、目の前の漆黒の眼はギラリと光った。どうやら、俺の答えなどはなから信じる気は無い様である。

「母さんの服が乱れているのは？」

その言葉にいまだに唸っている母へと視線を移す。

言葉どおりに観察すると、母の胸元のボタンが数ヶ所ほど外れており、女性の象徴が垣間見える。あまり、じっと見るとかなめに要らぬ誤解を与えそうなので、直ぐに視線を逸らしたが。

「昨日、暑かったから自分で外したんだろ」

春始めにしては、気温が高くなる事をニュースで報じていた。加え

て二人で寝ていた所為もあるのだろう。更に言わせてもらえば、実の母を襲うほど落ちぶれてはいない。こいつ、兄をなんだと思ってるんだ。

「兄さん、嘘を吐いても分かるのよ」

俺の心情を知る由もなく、かなめは真つすぐに俺の目を見つめてきた。逃がさないためか、両手で俺の顔を押さえ込まれたので、否応無しに俺もかなめの目を真つすぐに捉える。

しかし、数分経つとかなめが先に目を逸らした。と言うより顔ごと逸らされた。妹の行動は大半が意味不明、もしくは意味が無いのだが。今回も意図が掴めない為、次の行動を待つしかない。そう考えると損ばかりしている気もするが。

「御免なさい」

やがて、消え入るようなか細い声でかなめが謝ってくる。恐らく誤解が解けたのだろうが、何処か釈然としないままである。かなめに聞こうにも、顔を俯かせ沈黙を維持しているし、隣の母は相変わらず夢の世界だ。

何故か、自分だけ場違いの様な気がして、静かに深くため息を押し出したのであった。

13話 怒る妹、眠る母（後書き）

ラブコメっばいと思います。自信は無いですが。
それでわ、また次回。

14話 甘党な兄、甘過ぎな妹（前書き）

二日も間を開けてしまい、読んでくださっている皆様お詫び申し上げます。

それでわ、本編です。

14話 甘党な兄、甘過ぎな妹

涼しげなベルの音。

新たな来訪者を告げるソレに誘われる様に、ウェイトレスが目の前を足早に通り過ぎていった。

「どれも美味しそうね」

ぼそりと呟くかなめ。メニューを睨むその様は数十分ほど維持している。真剣に悩んでいる様で、話し掛けづらい。

仕方なくかなめから目を離し、ぐるりと辺りを見渡してみる。真新しいイスとテーブル、足早に動き回るウェイトレスやウェイターの方々。ゆったりとしたBGMが心地よく耳に届き、カウンター席にはコーヒーマーカーが置かれている。

ここは喫茶店である。

何故、このような場所に俺と妹が居るのかとは聞かれたならば答えなければなるまい。

総ては甘党と自負している自身にある。

新しいデザート、和菓子や洋菓子屋の新店舗が出来れば直ぐ様に駆け付け、食べ歩く。最近では自宅で作成し、母や妹に品評させて貰っている。時折、露骨に嫌がられる時もあるが。

ともかく、今回もそういった理由で学校帰りに寄る事にしたのだ。

ああ、イチゴパフェはまだか？

「兄さん、顔が凄い事に」

はたと我に返り、目の前のかなめに意識を戻す。いつもの眠たげな

半眼だが、やや眉を潜めて、気怠そうに頬杖をつくその姿からは確かな呆れが感じられた。

仕方ないだろ、好きなんだから。

「ほどほどにね」

どうやら表情が自然と懨然としてたようだ。小さな嘆息と共に告げたかなめは、通りかかったウェイトレスに注文し始めた。

赤いであろう頬をウェイトレスに悟られないように、改めて周りに視線をやる。見える範囲では女性客が主のようで、数少ない男性客は彼女に連れてこられたのが殆どなのだろう。所在無さげに辺りを見渡している一人と目が合ってしまった。なんで、お互い大変だよな
って目をするんだよ。

「結構、学生も多いみたいね」

そのかなめの声に注意して見ると、同じく学校帰りなのか制服姿の者が私服の客に混じりちらほら。その中にはクラスメイトも居た。渡辺、彼女いたのか。明日、クラスに伝えておこう。

「お待たせ致しました。イチゴパフェになります」

と、注文の品が届いた様である。さり気なく傍に立っていたウェ이터からパフェを受け取る。もの言いたげな視線を残し、その場を立ち去るウェ이터。

目付き悪い男が甘党で悪かったな。

「戴きます・・・美味しい、そして甘い」

率直な感想を言ったまでだというのに、目の前のかなめはため息を

吐く。失礼な奴である。

しかし、本当に美味しい。飾り付けられたイチゴは勿論のこと、生クリームはべたつくような甘さになっておらず、口の中に入れてしまえば、ふわりとした舌触りと共に溶け、残るのは爽やかな甘味。イチゴの甘酸っぱさと絶妙なコラボレーション。思わず、頬が弛んでしまうのも致し方ないのである。美味しいなあ。

「そんなに美味しいの？」

俺のご満悦な表情につられてか、半眼を少し開き、やや身を乗り出して聞いてくるかなめに思い切り首を縦に振ってやる。当人はその気が無いように振る舞っているようだが、その視線はパフェに釘付けた。

この美味しさを味わわせてやろう。

「ほれ、あーん」

イチゴとクリームを均等にスプーンに乗せ、かなめに差し出す。だが、かなめは顔を一瞬で真っ赤に染め、口を開いたり閉じたりするだけで食べる素振りを見せない。怒っている様では無いようだが我が妹ながら不思議な奴だ、クリームが滴れ落ちてしまった。

「ん？」

滴れ落ちたクリームを備え付けのナプキンで拭き取り、乗せたパフェを自分の口に入れ、改めてパフェをすくい乗せて差し出す。依然として顔は赤いままのかなめだが、口は真っすぐに引き締められ、何やら神妙な顔つきで差し出したスプーンを睨み付けている。

埒があかない。そう判断してスプーンを引っ込めようとした矢先、凄まじいスピードで腕を掴まれた。

「食べる」

ぼそりと呟くその表情は妙に鬼気迫るモノだが、生憎と顔が真っ赤なのでさして恐くは無い。私的にはパフェ一つ味見するのに覚悟が要るかなめが不思議で堪らないが、とやかく言っていると怒られそうなので止めておくでしょう。

「あーん」

「あ、あーん・・・」

促すと、ぎゅっと目を閉じ、真っ赤な顔で口を開けてくる。心なしか震えてるような気もしたが、このまま見ていると精神的に辛いので素早く口にスプーンを入れる。
なんか、顔が熱い。

「どうだ？」

問い掛けるも、味わっているのか、スプーンを離さないまま答えないかなめ。

このままでは、せつかくのパフェが食べれなくなってしまう。味わっている処で悪い気もしたがスプーンを引っ込める。

「あっ」

何故か名残惜しそうに声を上げたのが気になったが、パフェを食べる為に来ているので、気にしていられない。少し、時間を置いたのでアイスが溶けているがそのまま口に運ぶ。

うむ、甘い。

「美味しかった、とても」
「だよな」

妙に甘ったるいかなめの声に返事をしつつ、絶品のパフエに舌鼓を打つのであった。

14話 甘党な兄、甘過ぎな妹（後書き）

と、言うわけでカフェにてバカップルな二人なお話でした。性格が
今だに安定してないなあ。

書いている間にエロく感じたり、背中が痒くなった作者でした。

それでわ、また次回。

15話 困る兄と本を読む副担任

困った。非常に困った。

目の前のドアは押しても引いても開かない。勿論、引き戸では無いことも重々承知している。

何故ならば、ここは校内に存在する『資料室』と呼ばれる場所で、授業で使用する品々を取りに行かされる事が多々ある為だ。

『資料室』と名してあるだけに中は雑然としている。並べられた書庫には本がぎっしりと詰められ、整理する事を断念したのか通路を占領している本の山々。地球儀、黒板大のスクリーンや人体模型の頭部などといった小道具類がインテリアと化し、異質な空間を形成しているというのもある。頭部だけ置いてあるのはなんでだ。

「困りましたね」

背後から声。振り返った先には、山積みにもされた本に腰掛け、ブックカバーが掛けてある本を読んでいる春日井先生の姿。言葉の割に、表情が何時も通りの微笑みなのと、優雅に本を読んでいるのが非常に引く掛かるが、なにより言わなければならない事があった。

「誰の所為だと思ってるんですか」

やや陰を込めて言い放つ。しかし、俺の言葉に春日井先生の表情が申し訳ないソレに変化する気配はなく、数瞬だけこちらに視線を移し、再び本に目を通し始めた。

模型投げるぞ、コラ。

そう、『資料室』に俺が居る理由。否、閉じ込められた原因となつたのは目の前で読書を行っている春日井先生にある。

放課後、部活に入っていない俺は終の挨拶を済ませ、早々に帰宅しようとして教室を出る間際に腕を掴まれたのだ。振り向いた先には楽しそうに微笑む春日井先生の姿、嫌な予感を感じながらも用件を聞くと、今日中に探さなければならぬ資料があるから手伝ってほしい、というモノ。

直ぐに済むだろうと思ひ込み、付いていった先は『資料室』なのだ。そして、資料の山を掻き分けながら捜し回る内、気が付けばドアが開かなくなっていたという訳である。

大方、教師か警備員の方が鍵を閉めたのだろうが、中を確認してから閉めていつてほしい。

後の祭りなのは分かってるけど。

「はあ」

つい、漏れるため息。下手をしたら翌日まで出られないかも知れないのだ。頭を抱え視線だけ春日井先生へとやると、今だに読書中の様。先生の座高より高め本の山に腰掛けている為、浮いた足を左右に揺らしている。

よく、この状況で本なんか読めるな。

「さつきから熱心に読んでますけど、何の本なんですか？」

春日井先生が読んでいる本はブックカバーが掛けてある為、こちらからタイトルなどを読み取る事ができない。それだけならまだしも妙に面白そうな表情で読んでいる春日井先生の姿が合わさって、好奇心を抑えきれなかった。

「気になりますか？」

問いに愉快そうに細められた瞳がこちらに向けられる。口元は本で隠れている為、窺い知る事は出来ないのが引つ掛かるが、聞いてしまったので致し方ない。

首を縦に振り先を促すと、より目が細くなつたので不安を感じてしまふ。

やがて、春日井先生は焦らすように咳払いをして、

「タツヤはリョーコの乳房をまさむぐつ」

「有難う先生、もう結構ですので黙って本を閉じてください」

音読し始めたのを素早く近付き、口を抑えることで阻止した。不満そうに眉を寄せる変態ドS教師から本を奪い取り、適当に放り投げる。投げた本は一つの本の山に当たった様で、小規模の雪崩の音が聞こえてきたが構っていられない。

「よりによつて、官能小説を選びますか？」

犬歯をむき出しながら、春日井先生に問いただすと同時に抑えていた手を離す。俺の反応が予想通りだったのか、不満そうな表情を何時もの微笑みに一変させる春日井先生。

本気で訴えるぞ。

「ちょうど目についたモノですから」

さらりと宣う春日井先生だが、浮かべている笑みが、口角を強くあげる小馬鹿にしたような笑みなのを見る限りでは確信犯だろう。間違はなく、中身を知っていたのだ。恥じらいといった可愛らしいモノなど持っていない目の前の人ならば可能だろう。

「失礼な事を考えてるんだったら、さっきよりハードな官能小説を朝のHRで朗読させますよ」

「社会的に死ねって事ですか」

女性のカンは憎らしいほどに素晴らしいと痛感させられ、些細な抵抗も虚しいモノとなってしまう。それに伴い、押し黙る俺を見てか、春日井先生は満足そうに一つ頷くと普段通りの微笑みを浮かべ、本の椅子から降り立った。

ふと、壁に掛けられた時計を見ると短針は五時を指している。その事に何か大事な事を忘れているような気がして、頭を回転させるが先程のやりとりが尾を引いていて思い出せない。

「あら、もうこんな時間。そろそろ帰りましょうか？」

その声に春日井先生へと意識を戻すと、腕時計に目をやり、何処から取り出したか鍵を左手の中で弄んでいる姿がある。

鍵。鍵。鍵？

「先生、それ」

「鍵ですよ」

腰に右手を添え、至極真面目に返される。差し出された手の中にある物は正しく鍵で、『資料室』と書かれたラベルが貼ってあった。うん、鍵だよな。

妙に腑に落ちない俺を置いて、唯一の出入口であるドアへと向かう春日井先生の後ろ姿。歩きたびに揺れる黒髪を眺めながら考えるもどうにも答えに行き着かない。

「ボーツとしてないで、早く出てください。学校に泊まりたいなら構いませんけどね」

慌てて、意識を戻すと開け放たれたドアの向こうで微笑む春日井先生の姿。タイミング良く夕日がバックになっている為、女神の様に見えた事を異次元に葬り、足早に部屋を出る。
女神にしては性格は極悪だしな。

少々、耳障りな音と共にドアが施錠される。完全に鍵が掛かった事を確認した様子の春日井先生がこちらに振り返る。何処となく頬が赤い気がするが、夕日の所為だろう。

「今日は有難う。今度お礼にお茶でもご馳走してあげるから、その時は言うてくださいね。」

何時もの企んだような笑みとは違う、見惚れてしまった恥ずかしげな微笑みを浮かべ、春日井先生は職員室の方へと去っていった。
な、なんなんだ。一体。

ちなみに帰宅直後、疑問が解決し疲れがどっと押し寄せてきたのは言うまでもない。

15話 困る兄と本を読む副担任（後書き）

執筆ペースが日増しに遅くなっていく作者です。字数も減ったり増えたり。最低だなあ。

さて、15話。女神なのか悪魔なのか副担任と勢いに弱い兄とのコマでした。如何だったでしょうか？

それでわ、また次回。

16話 食堂にて、蕎麦を啜る兄と天真爛漫な子

昼時の学食は戦場である。誰が言ったのかは定かではないが。確かに目の前の光景を見ている限りでは、強ち間違いではない気もする。二手に分かれ、効率よく席と昼食を勝ち取る者。立場を使い、半ば強引に確保する者。心優しき者が明け渡した席を奪い合う者たち、そしてそれらを生暖かい目で見守る食堂の主、おばちゃん。うん、おばちゃん凄いわ。

寛容な心を持つおばちゃんたちに尊敬の念を送る。と、目の前を井が通った。井を持つやや細い腕を確認し、徐々に視線を上げていくとYシャツに黒のエプロンが見えた。察するに食堂の方だろう。

「有難うございます」

蕎麦が入れられている井を受け取り、礼を延べつつ配膳をしてくれた方の顔に視線をやる。

肩程まで伸ばされた黒髪は、後ろに一つに括つてある様だ。生憎、目元まで髪が伸びている為、目付きのほどは窺い知る事ができないが美形と呼ばれる顔立ちだろう。新しい人か？

「蕎麦、好きか？」

耳に届く声。しばらく、目の前の人が発したと気付かず、ぼうつと見上げてしまった。低い声音からすると、男性の様だ。前髪の間か

ら、ちらりちらりと覗く瞳がこちらをじっと見据えている。
ぼうつとしてる場合じゃないな。

「好きですよ」

そう答えると、食堂の方と思われる男性は一つ頷き、トレイを片手にカウンターの方へと去っていく。

茫然とその後ろ姿を見つめるしかなく、やがて男性の姿は生徒たちの中へ紛れ込んでしまった。

なんだがよく分からないが、せっかくの蕎麦が冷めてしまうので食べってしまうでしょう。

各テーブルに備え付けられた七味入りの小ビンを取り、湯気を立ち上らせている蕎麦に振り掛ける。先程のやりとりで少し冷めた気もするが仕方あるまい。

さて、それでは。

「せーんぱいつ」

いざ、箸を割ろうとしたところで聞き慣れた声。中途半端に割れた箸を持ったまま声の方へと視線をやる。そこには満開の笑みを浮かべ、両手でトレイを持つ後輩、美鈴ちゃんの姿があった。

「あれ？今日は学食？」

「ハイッ。今日はお弁当無しの日なんです。あっ、ここ空いてますか？」

相変わらず元気一杯な美鈴ちゃんの手が塞がっている為、視線で俺の正面の席を見下ろした。特に断る理由もないので了承し、折れた箸を脇へと置いて新しい箸へと手を伸ばす。

「有難うございますっ」

こちらが礼を言いたくなる様な笑顔を浮かべ、トレイを下ろし席に座る美鈴ちゃん。下ろされたトレイの上には、真っ白な皿に盛り付けられたカレーライスが芳しい匂いを漂わせている。今度はカレー食べよう。

「先輩はお蕎麦ですか」

こちらの蕎麦を見ながら美鈴ちゃん。自分のカレーライスがあるにも関わらず、その目は物欲しそうである。何気なく腕で井を隠してやると、少しだけ口を尖らせて睨まれる。

「そんなに隠さなくていいじゃないですか。わたし、そんなにお腹減ってません」

続け様に非難混じりの言葉を述べ、頬を膨らませて備え付けのスプーンを手に取るやいなや、勢い良く食べ始めた。その非常に分かりやすい怒り方が、とても彼女らしくて、思わず吹き出してしまう。釣り上がった目が睨んできたので、直ぐに引っ込んでしまったが、俺も食うかな。

新しい箸を割る。

綺麗に割れると得した気分になるのは何故だろうな。

さて置き、目の前の蕎麦は持ってこられた当初より、大分、冷めた様で立ち上る湯気が少なくなっていた。自業自得なのは承知しているのだが、やはり悲しいモノである。無言で蕎麦を啜る。少々、軟らかくなってしまったが、美味しさは変わらない様だ。

「先輩？」

三口程、啜った処で美鈴ちゃんの声が掛かる。傍に置いた水入りのコップを手に取り、口内の蕎麦を流し込んで美鈴ちゃんへと視線を移す。何やら哀しげに眉を寄せている。

「怒っちゃいました？」

「はい？」

突拍子な質問に、思わず間抜けな声を上げてしまう。鳩が豆鉄砲を受ける、というのがよく分かったがそれどころではない。茫然と美鈴ちゃんの次の言葉を待っていると、哀しげな表情が、益々、明確なソレに変化した。

意味が分からないぞ。

「ちょっと待った。何で泣きそうなんだ？」

どうにか平静を取り戻してきた頭を、必死に回転させて聞く。しかし、答えると目尻に溜まった涙が決壊してしまうのか、美鈴ちゃんは黙したままだ。このまま泣かれてしまうと、良心が痛む上、何より状況的に非常にマズイので脳内のパソコンを最大限に稼働させる。美鈴ちゃんの登場、カレーライス、物欲しそうな表情。オーバーヒート寸前、ふと一つの答えが導きだされた。

「もしかしてさ、美鈴ちゃん勘違いしてないか？」

俺の言葉に顎に手を当て首を傾げる美鈴ちゃん、典型的すぎる困惑の様にほのぼのしてしまうが、早々に誤解を解いてしまう。

「そう、勘違い。さつき、俺の蕎麦を見てただろ？それで俺が隠したら美鈴ちゃんがちよつと怒ったよな？それで、俺が不快に感じたとも思ってるんじゃないか？」

一気に喋る。目の前の美鈴ちゃんの反応は、暫らく目を白黒させ、合点がいったのか、手を打ち鳴らした。しかし、驚愕の表情も束の間、またもや目尻を下げ哀しげに目を伏せる。見てて飽きない子である。

「もともと、俺が悪いんだし。美鈴ちゃんが気にする事無いさ」

謝罪の言葉と共に、美鈴ちゃんの頭に手を伸ばす。座っている為、やや腰を浮かしてしまっただが根性で踏張り、そのやや栗色の髪を撫でてやる。

撫でること数分。腰が限界の叫びを発した時、顔を伏せていた美鈴ちゃんが勢い良く顔を上げる。先程までの哀しげな表情は完全に引っ込んでしまった様で、何時もの屈託の無い笑みを浮かべていた。

やれやれ。

「分かってくれた？」

「ハイッ。えへへ」

頬を赤く染めて頷くのを確認し、俺は撫でていた手を引っ込め、気付かれないよう最小限の動作で浮かしていた腰に休息を告げる。過酷な労働に文句を言っているようだが気にしないようにしよう。

腰を擦りつつ正面の美鈴ちゃんへと視線を戻すと、笑顔で食事を再開していた。鼻歌でも実行しそうなくらい嬉しそうなのを見る限り、機嫌は持ち直した様だ。俺も食事を再開しようと手元の蕎麦を見下ろす。

うわぁ。

見下ろした先の蕎麦は、伸びきっていた。何事かそこちらを見てくる美鈴ちゃんに、手を左右に振ってやり過ぎしながら、俺は伸びに伸びきった蕎麦を啜るのだった。

16話 食堂にて、蕎麦を啜る兄と天真爛漫な子（後書き）

地味に長くなる〓執筆ペースが倍になる、綺麗に比例しないのが悩み処です。

さて、16話。兄と美鈴の

お話でした。分かりやすい新キャラ伏線まで入ってましたが、如何だったでしょうか？

それでわ、また次回。

17話 リビングにて、兄妹が苦手な大人な人（前書き）

遅くなりすぎました（汗）平にご容赦を。

17話 リビングにて、兄妹が苦手な大人な人

その人の名は、御奏^{みそう} 奏女^{かなめ}。すらりとした長身痩躯、背中まで伸ばされた髪は毛先辺りで纏められ、控えめとは言い難い大きな胸を誇らしげに反らしながら町内を闊歩するその姿はとても勇ましく、自信に満ち溢れているものだ、とはご近所の奥様方の談。

曰く。一夜の間に下着ドロを二桁に及ぶ数を捕まえた。警察庁から勧誘の電話が連日して掛かってくる。彼女が町を歩くだけで犯罪が減る、と、奥様方の話を鵜呑みにするならば、物凄い人物になってしまうが、実際はおしとやかで清楚可憐なお姉さん、といった印象を受ける。

あくまでも俺個人の見解に過ぎないが。

「で、用って？」

炒れたてのホットコーヒー入りのマグカップをテーブルに置きながら、ソファに座る、白のブラウスに膝丈のスカートの女性、前述の当人である奏女さんに問う。ちなみに、その隣では制服姿のかなめがもそもそとクッキーを食べていた。

リスみたいだな。

「有難う」

静々とカップを手に取り、一口。ほっつと安堵にも似た息を吐き、奏女さんはしつとりと微笑んだ。

「用事が無いと来たらいけない？」

少しだけ、眉を寄せて問うてくるその姿に、頭を左右に振って否定すると納得したのか、その表情を微笑みへと戻した。

正直に言つて、俺はこの人の微笑みが苦手である。何故かしら、とても動揺してしまうのだ。見透かされているような心地を覚えてしまう。別に不快に感じる訳ではないのだ。少々たれ目がちな瞳を細め、紅色の唇を笑みの形に縁取るその表情は見惚れるくらい綺麗なソレなのだが。本能的なモノなのだろう。

「奏女さん、大学は昼までだったの？」

今まで黙々とクツキーを食べていたかなめがピタリと動きを止め、隣に座る奏女さんへと話し掛けた。

昼まで。かなめがそう尋ねたのには理由がある。テスト期間中の為、昼頃に帰宅した俺とかなめが玄関先で見たのは、ウチのインターフオンを鳴らす寸前の奏女さんの姿があつた。通常、大学の講義やサークル、バイト等で忙しい日々を送っているらしい奏女さんが、この時間帯に姿を見せるのは珍しい事なのである。その為、かなめと二人で本人かどうか話し合う事は必然だった。もっとも、奏女さんから話し掛けてきたので、徒労になってしまったのだが。

「そう。急いで終えなきゃいけない用事も無いからね。かなめちゃんたちと遊びたかった、というのが一番の理由かな」

包容力、溢れんばかりである。微笑みを強くした奏女さんは、答えを聞いて頬を赤らめたかなめの頭を撫で始めた。案の定、そういった直接的な可愛がりに弱いかなめは頬の紅を強めて俯いてしまう。かなめも奏女さんには弱いんだよな。

「ふふ、顔が真っ赤」

楽しくなってきたのか、奏女さんは慈愛に満ちた微笑みを、意地の悪い笑みへと変えてかなめの頬の赤さを指摘した。途端、かなめが勢い良く顔を上げる。

トマトもびっくりな赤さだなあ。

「っ」

勢いそのままに、何か反論しようとしたらしいかなめだったが、刹那、奏女さんがかなめの耳元で何か呟いた。見る見るうちにその赤い顔が更に赤くなり、しばらく声にならない声を発し、再び俯いてしまう。

な、なんだ？

二人のやり取りが飲み込めず、茫然と見つめていると、かなめを眺めていた奏女さんがこちらへと視線を移してきた。その表情が眉を寄せた困り顔なのが気になる。もっとも、俺の困惑を余所に何を納得したのか、奏女さんは一つ頷くとお茶請け代わりのクッキーを一つ手に取った。

「要くんの手作り？」

「え。ええ、そうです」

半ば反射的に返す。基本的にウチに置いてあるお菓子は我が手作りで、休みの日に趣味、もしくは家族が駄々を捏ねた時に、お菓子を作り置きしてあるのだ。ちなみに今回はチョコチップクッキーと、レーズンとオレンジピール入りのクッキーだ。我ながら美味しく焼けたと思う。

「美味しい。要くん、お店でも出したら？」

ニツコリと喜びの色を表情に押し出して奏女さんが称賛の言葉を投げ掛けてくれる。思わず顔が熱くなるのが分かり、照れ隠しとしては分かりやすいであろう、頬を掻いて言葉を濁しておく。やっぱりこの人は苦手だ。

俺の反応に少しだけ笑みを強めてクッキーを味わう奏女さん。気恥ずかしさにコーヒーを飲もうとして口内を火傷する俺。そして依然と俯いたままのかなめ。それぞれが発する雰囲気、リビングは静寂に満ちている。

と、かなめが顔を上げた。その頬は僅かに赤いが、どうやら落ち着いたようである。テーブル上に置いてあったテレビのリモコンを手にとると、程なくしてテレビの電源が入られる。

『——園では、レッサーパンダの赤ちゃんが生まれ、訪れた家族連れに好評を受けている様です』

映し出されたのは、生後間もない、レッサーパンダの赤ちゃんが眠たげに欠伸をしている映像。よたよたと動き回るその姿は危なっかし、それでも心和ませる姿である。

ふと、テレビから目を離し、二人の様子を伺うとどちらの表情も柔らかく、流れる映像に心癒されているようだった。二人の聖母の様な微笑みに、思わず見惚れてしまう。早まる動悸を宥めようと視線をテレビに戻し、コーヒーに口をつける。すっかり、冷めたな。

『——続いてのニュースは、最近、急増している新手の窃盗事件についてお送りいたします』

その言葉と共に、映像は原稿を読み上げるアナウンサーから、とある住宅地の一角を撮ったモノに切り替わった。少しだけ危機感を覚えながら映像を眺める。

窃盗犯は数人で構成され、訪問販売、引越しの挨拶などと偽り、一人が家の住人を引き付け、残る数人が裏口や窓から侵入し金品を盗むといった手口。平日の昼間を中心に窃盗を繰り返し、被害は数千万。

「うちも気を付けないとな」

「頑張つて、兄さん」

何時の間にやらクッキーを片手に、抑揚の無い声音で淡々と応援してくる無責任な妹を睨む。もつとも、捻くれ者のかなめが俺の思惑など察してくれる訳もなく、手に持っていたクッキーをもそもそと食べ始めた。

もう少し、美味しそうに食べても良いだろ。

「美味しい」

ぽつりと。数瞬、言葉の意味が飲み込めず、茫然とかなめを見つめてしまう。対するかなめもこちらに眠そうな半眼を向けていて、その表情が柔らかに微笑みを浮かべた。そこで初めて理解し、慌てて視線を逸らした。

「ねえ、この現場ってこの辺りじゃないかな？」

と、今まで沈黙を保っていた妻さんの声。促されるままにテレビへと視線を移すと、映像は被害にあった住人のインタビューへと切り替わっていた。

被害にあったのは三日前、銀行の通帳やカード類が盗まれ、総額約

一千万。プライバシー保護の為、被害者の顔や音声は処理してあるが沈痛そうな声である。

と、映像が被害現場近隣を撮ったモノへと切り替わる。その現場は奏女さんの言葉通り、確かに我が家の近くの様で、通学路として必ず通る住宅地の一角である。

「本格的に警戒しないとマズイかもな」

「そうね。母さんにも言っておくわ」

俺の言葉に、珍しく素直に同意するかなめの声。明日は我が身、と言う言葉通り、今回ばかりはボケる事はしないようだ。平日が休みになる事が多い母に注意しておけば多少は大丈夫だろう。だが、これは家族が居る場合である。窃盗団は住人が一人限りの時を狙ってくるらしく、一人暮らしの方たちは標的にされやすいのかも知れない。

そこで思考を止め、奏女さんへと目をやる。そう、今この場に居る中で一人暮らしをしている人物は奏女さん、その人である。彼女自身もソレを危惧しているのか、テレビを見るその表情は真剣だ。それでも、何処かおしとやかなイメージを拭いきれない奏女さんを見る限り、どうにも不安に感じてしまう。

余計な世話か。

「奏女さんも、気を付けた方が良いですよ。ほら、一人暮らしですし」

頭の中ではそう考えているのだが、つつい言葉が出てしまった。少しだけ後悔しつつ、奏女さんの答を待つ。

数瞬の後、奏女さんがこちらへと顔を向ける。その表情は目を細め、

口角を弛ませた柔らかかなソレである。どうやら、迷惑とは受け取っていない様で胸中で息を吐く。

「心配してくれたのかな？」

「当たり前じゃないですか」

さも意外そうな声音で返してくる奏女さんに、再度、少し強く声を上げて返す。更に続けようと口を開いたところで、奏女さんの表情が嬉しそうなモノへと変化する。訳が分からず、口を閉じるより他無くなってしまった。

「大丈夫よ」

そこで聞こえてきたのはかなめの声。何故かしら刺のある声音が気になり、かなめへと視線を移すと、眉を寄せ、半眼を更に細めて睨み付ける表情でこちらを見ていた。何処となく拗ねている様にも見て取れる。

「な、なんで怒ってるんだよ？」

「怒ってない。それより心配する必要は無いわ」

憮然とした態度のかなめに、確実に怒ってる、と追求しようと口を開きかけたが、じろりと睨まれ断念せざるをおえなくなってしまう。仕方なく、鬼気発するかなめの視線を出来るだけ気にしないように努めながら、奏女さんへと再び目をやると、愉快そうに微笑んでいた。俺とかなめの交互を見ながらである。

今、面白いトコあったか？

「あ、ゴメンね。なんでもないの、気にしないで」

「は、はあ」

「心配してくれて有難う。かなめちゃんの言う通り、わたしは大丈夫だから」

涙まで出てきたのか、目端を押さえながら豪語する奏女さんの表情は満足したとでも言わんばかりの笑みで、その隣に座って、クツキーを今までの倍のスピードで食べ始めたかなめの無然とした表情とは、見事に対したソレであった。

翌朝の朝刊。

地方欄のトップは窃盗団を捕まえ、県警から表彰状を受け取る奏女さんを映した物だった。

取り敢えず、奥様方の噂話やかなめの太鼓判は真実だと判明した。

人は見かけで判断するもんじゃないな、うん。

17話 リビングにて、兄妹が苦手な大人な人（後書き）

どうも、人として許しがたい更新ペースの作者です。

さて、17話。兄と妹が頭が上がない同名の人とのお話でした。如何だったでしょうか？ちなみに母初登場の話に出た伏線の人物ではありません。それでわ、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8448b/>

楽しければ良いんじゃない？

2010年10月28日05時38分発行